

共創先導プロジェクト(共創促進研究) コミュニケーション共生科学の創成 意見書(令和7年度)

アドバイザリーボード委員
柏岡 秀紀

(1) プロジェクトの特徴的な取組・特筆すべき成果

本プロジェクトは、すべての特性を持つ人々が同等に参加できる「コミュニケーション共生」の実現を目指している。この理念のもと、「視覚」「非視覚」「脳機能」「個人の特性」という4つのコミュニケーション課題に着目した研究班を編成するとともに、特定の班に限定しない「プロジェクト協力者」として外部参画者を募った。これにより、個別研究班における議論に加え、プロジェクト全体を俯瞰する定例会を通して横断的な議論を促進し、個別課題の成果整理のみならず、研究班間の連携による課題解決の推進を図っている。

令和6年度は、ロードマップに位置付けた「研究集会の開催」をオンライン形式で継続的に5回実施したほか、中間報告会および全体会を国立民族学博物館にて開催した。これらの機会を通して、研究活動の進捗共有や課題認識の再確認を継続的に行うとともに、外部の医師や専門家を招いた講演を実施し、主たる関連学会以外との協力体制の構築にも取り組んだ。中間報告会および全体会では、参加者全員で手話を用いた脱出ゲームや、視覚障害者と晴眼者が聴覚・触覚を通じて協働できるゲームの体験、アイトラッカーを用いた展示鑑賞ガイドの体験などを実施した。これらの活動により、課題の重要性や困難性、そして達成した際の楽しさを参加者自身が体験し、取り組みが特定領域に閉じないよう、総合的な視点から課題へ向き合う姿勢を再確認した。

(2) プロジェクトの自己点検結果及び課題等

本プロジェクトは、各課題への対応を着実に進めている。また、研究成果を広く社会に発信するため、オンライン研究会等で得られた知見をまとめた書籍出版を計画している。令和6年度にはその第一弾として、『やさしい社会をみんなで創るために:コミュニケーション共生科学への誘い』を、ブックレットシリーズ「コミュニケーションの未来を創る」第1巻として執筆した。シリーズとして全10巻の刊行を目指している。

一方で、対象範囲が広範にわたるため、個々の領域を継続的に追い続けることが難しいという課題も生じている。他領域の専門家を招いた研究会、中間報告会、全体会などを通じた交流・協働の推進は重要な取り組みであるが、その維持と発展が今後の大きな課題となる。また、個別の研究成果が良好であっても、統合的な「コミュニケーション共生」の観点からは相反するケースが存在し、整合性の確保が求められる。まさに「コミュニケーション共生」課題であり、研究の進展に伴い、新たな課題が発生する可能性を内包した領域であることも明らかとなっている。

これらの課題に対応しつつ研究を前進させるためには、プロジェクトメンバー間で「コミュニケーション共生」の基盤となる理念を徹底的に共有し、情報交換を密に行いながら、課題を段階的に整理・共通化していくことが不可欠である。今後、幅広い領域とのコラボレーションを実現する活動を継続しつつ、課題解決の枠組みをより大きな視点から再構築し、全体を俯瞰しながら各領域の具体的課題に取り組むことが求められる。